

The changes in rural space through the cognition of place names

著者	Fujinaga Go
内容記述	Thesis (Ph. D. in Science)--University of Tsukuba, (A), no. 2863, 2002.3.25 Includes bibliographical references
発行年	2002
URL	http://hdl.handle.net/2241/5629

氏 名 (本 籍)	ふじ なが こう 藤 永 豪 (佐 賀 県)
学 位 の 種 類	博 士 (理 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2863 号
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	地球科学研究科
学 位 論 文 題 目	The Changes in Rural Space through the Cognition of Place Names (農山村における住民の地名認識からみた村落空間の変容)
主 査	筑波大学教授 理学博士 田 林 明
副 査	筑波大学教授 理学博士 斎 藤 功
副 査	筑波大学教授 理学博士 手 塚 章
副 査	筑波大学教授 理学博士 村 山 祐 司

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、農山村における住民の村落空間認識の差異とその規定要因を明らかにすることを目的とした。そのために、本研究では通称地名を基礎データとした。これによって、住民の生活をより反映したミクロスケールでの空間認識を明らかにすることが可能となった。

山村の事例として佐賀県脊振村鳥羽院下地区を、平地農村の事例として同県三根町田中地区を選定した。両地区において、現存するすべての耕作地に関する通称地名を採取し、これらの地名の認識状況から住民を複数の集団に分類した。次に、従来の研究では注目されることのなかった村落空間の認識の形成過程に着目して、住民の地名習得の過程を考察した。そして、その過程から住民の地名習得のための諸条件を抽出し、それらを耕作地と住民の属性に分けて類型ごとに検討した。その結果、地名習得の条件には住民によって差があり、同じ村落空間でも住民によって認識が異なることが判明した。

山村と平地農村では、住民の地名の習得過程に違いはなく、自世帯所有の耕作地の名称と位置から認識が始まり、それを核として、他世帯で所有する耕作地に認識が広がっていった。この核の形成には住民自身の農業従事はもちろん、地名の継承という観点から、彼らの両親と配偶者の就業状況が大きく影響していた。地名認識の拡大、つまり、他世帯所有の耕作地の認識については、就業、農業従事状況、集落や生産組合の会合、共同農作業への参加状況などが規定要因として作用していた。そして、これらの地名習得条件は若い住民ほど限られ、地名認識の程度が低くなるという世代間の差につながっていた。

さらに、本研究はこの世代間の地名認識と規定要因の差異の背後にある、住民の生活基盤に注目した。住民の地名習得の過程から判断して、住民が農業に従事し、様々な会合や共同農作業に参加するようになり、本格的に地名を認識し始めるのは当然、学校卒業後である。つまり、住民が就業時期を迎えた時代の生活基盤が彼等の地名認識の基礎をなすものと考えられ、各類型における住民の地名認識はその時代を代表するものと判断できる。すなわち、地名認識における世代間の差異は住民の認識する村落空間の変容過程を表しているのである。このことから、住民の生活基盤は、1950年代までの農業、1960年代の高度経済成長期に始まる農業と農外就業、1980年代以降の安定性長期に定着した農外就業の3つに分けられ、これらに対応しながら、住民の村落空間認識は、共有された空間認識を保とうとする「維持の段階」、自世帯で所有する耕作地とそのわずかな周辺部を認識する「後退の段階」、そして、所有耕作地に関してさえ認識が低くなる「崩壊の段階」を経ることが明らかとなった。さらに

平地農村の場合、近年の圃場整備によって空間そのものが作り変えられるとともに、住民の生活様式が変化したこともあって、自世帯内のみで通ずる新たな地名を用いた空間認識が生まれつつあった。すなわち、新たな村落空間への「再編成の段階」を迎えたといえる。これに対して、山村では地形的な制約から大規模な圃場整備は実施されず、旧来の地名は基本的に細かく、狭く分散した耕作地を示すためにある程度残存している。加えて、山村と平地農村では住民の認識する村落空間の変容に時間的なずれが生じていた。山村よりも平地農村の方がその進行が速い。これには都市への近接性に起因する雇用機会の違いやモータリゼーションの浸透の時期の差異が影響していた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、これまで国内外において多く研究されてきた公称地名ではなく、耕作地に関する通称地名を用いることで、住民の村落空間の認識の特性とその変化を詳細に明らかにすることができた。具体的には、地名認識をもとに住民を複数のグループに分類し、各類型における地名認識の特徴とその規定要因を考察した。加えて、これまで注目されることのなかった、住民の地名の習得過程を検証した。その結果、単なる住民間の村落空間認識の差異のみにとどまらず、世代間の差からその動態的变化を分析し、村落空間の時間的变化の過程をも示すことができた。このように本研究は通称地名を用いることで、ミクロスケールでの住民の空間認識の解明を可能にし、さらに住民の中からいくつかの同質集団を抽出し、それが世代ごとに異なる生活経験によることを実証した点で高く評価する事ができる。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。